熊野の森から

怪しの熊野

其の七十九

「本宮町の怪異（其の八）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

本宮のどこかは分からないが「じしゃくいし」といって、何でもくっつけてしまう変わった石が座っている山道があるという。鉄でできた物が前を通ると、すきやくわ、鎌から馬のひづめまでくっつけてしまう。

本宮周辺の妖怪マップ。青線が熊野古道。赤線は現在の国道。これだけ高密度で妖怪の伝承が残る地はまれで、意外と古道沿いにも多い。（国土地理院Webマップを改変）

また、湯川の岩神峠で歌を歌うと、どこからともなく現れて狂ったように浮かれ踊る「おどり坊主」が出るという。これは、以前にも詳しく紹介している。熊野の各地には「夜雀（よすずめ）と送り狼（おおかみ）」の話が伝わるが、本宮にもある。送り雀は夜に山道を歩いているとチンチンと鳴きながら後をつけてくるが、誰も姿を見たことはない。送り雀がついてくると、狼も一緒についてくるというものだ。発心門で不思議な蛇を見た後、3年間は体に力が入らなくなって寝込んでしまい、回復した後に人の病を治すようになったおじいさんがいたそうだ。他にも見た人がいるが、見た人は必ず高熱を出して死んでしまったという。本宮の山道にはさまざまな怪異が潜んでいる。

本宮大社旧社地の大斎原（おおゆのはら）の北側に建つ大鳥居。高さ33.9m，幅42mと日本一の大きさを誇る。平成21年の建立と新しいが，今では信仰の地，本宮のシンボルとなっている。

本宮に伝わる水にまつわる怪異として、河童（かっぱ）、牛鬼（うしおに）を紹介してきたが、請川のメウジャ淵には「足ナカ」が出たという。アユ捕りに来た人の近くの水中から川上に向かって鰡跳（イナトビ）のように跳び上がると、アユは全く捕れなくなるという。カワウソが化けたものなのかも知れない。メウジャ淵のことを地元で聞いてみたが、その場所は分からなかった。

また、皆地には陰陽師（おんみょうじ）、安倍晴明（あべのせいめい）の話が伝わっている。例えば、ヒルに苦しんでいた農民のため、清明が大石にヒルを封じ込めた蛭伏せ石（ひるぶせいし）が今も残されている。また、その昔、大きな日陰をつくって村人を困らせていたクスノキがあった。切り倒そうとおのを入れても、翌朝には切り口はふさがり元通りに戻っている。清明が占ってみたところ、満月の夜に大クスの枝をつたって鏡神社を訪れる高野池の主の仕業だと分かった。切り倒すには昼夜休まずおのを入れ続け、その切りくずを全て焼き尽くすようにとのこと。村人はその言葉通りに七日七夜切りつづけ、ようやくのこと切り倒すことができたという。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。